

Historical GIS の地平(SIG-CH83) 7/26 於, 帝塚山大学

セッション6 歴史地理(集落), 発表 No.18

### 近世地誌書の分析

溝口常俊 (名古屋大学)

#### I 研究目的

本研究の目的は, 近世・近代の地誌, 地籍資料という文字情報をデータベース化するとともに, GIS を使用してそれらを図像化して当時の地域を甦らせることにある。尾張には, 『寛文村々覚書』(1672) および『尾張徇行記』(1822) という優れた近世地誌があり, 明治期には全村の地籍帳・地籍図(1884)が残されている。また, 美濃においては全村を網羅する近世地誌は見あたらないが, 皇国地誌としての『岐阜県各郡町村略誌』(1881)が村別に豊富な情報を与えてくれる。

覚書と徇行記は, 各郡における藩政村ごとに, 土地の種類別, つまり本田と新田および林野に分けて, その石高, 面積, 租税額が記載されており, また村ごとの戸数, 人口, 牛馬数, 寺社数さらには助郷の状況, 最寄りの町村までの距離も明記されている。明治時代の町村略誌になると, これらの情報に加えて, 領主・支配者の変遷, 全作物の種まき時期と収穫時期,

およびそれらの収量, 民有地価, 共有財産, 協議費収支, 民有船舶・車・銃の数, 資産額別戸数, 各種職業・労働に対する賃金, 学校と児童数等が記されている。また, 人口に関しても男女別, 出入寄留者別, 族(士族・平民)別, および職(農・工・商)別に精査されている。これら全ての項目について分布図を作成し, それらを比較検討することによって地理学的想像力を働かせ, 当時の経済・社会・文化を探り, 空間秩序を読みとる作業を行った。

本発表では, 1)尾張・美濃における上記の地誌の地図化と地域像, 2)G.W. スキナーの中心一周辺論への適用, を中心に報告し, 今後の全国展開へのステップとして 3)隠岐の地誌・仙台の地誌分析の一部を紹介する。

#### II 尾張・美濃における地誌の地図化と地域像

1. 1世帯あたり家族員数: 近年少子化, 核家族化が進み, 1世帯あたりの家族員数は3人前後である。しかし, 1世代前の終戦直後は兄弟数人というのが一般的であり, 時代を明治, 江戸と遡ればもっと多かったのではと想像していた。それが, 現, 名古屋市域の町村を対象に寛文12年(1672)と文政5年(1822)の2時点で分布図を作成してみたら, ほとんどすべての町村において, 前者では確かに6人を越えていたが, 後者においては4人

を切っていた。江戸時代の150年間に現在に近いの核家族化が進んでいたのである。直系3世代同居を理想とする日本の家族形態が、幕末に一時期ではあるが、崩れていたことになる。

**2. 青物市を中心とした圏構造：**徇行記(1822)に記載されている尾張各村の生産物の分布図を作成したら、下小田井青物市(大消費地名古屋に隣接する卸売市)を中心に同心円状に生産特化がなされていた。すなわち、近い村では葉物、瓜などの腐りやすい野菜が作られ、やや離れた村では大根、ゴボウなどの根物、遠くの村では茶、ゴマ、豆などの長持ちする作物が栽培されていた。そこには、自分の村で何を作ったら一番儲かるかという農民の知恵を知ることができる。また、知多半島の多くの村が地酒を江戸に運んでいた。このことから名古屋圏というローカルな大市場の上部にさらに大きな江戸全国圏が張り巡らされていることが伺われる。米もない水もない知多半島で、森田酒造を代表とする酒がなぜ醸造されるのか。この間には良質の米を運んだ海運、溜池の水源となる湧き水が関与していると考えられる<sup>1</sup>。

**3. 田と畑の分布論：**尾張はその東半分が丘陵地、西半分が沖積平野である。そこから東部は畑一色、西部は田一色というイメージが強い。ところが実際に田畑の分布図を作成してみると、すべての村が田と畑を持ち合わ

せているのである。なぜ東部丘陵地に田が、そして西部デルタ地帯に畑が、という謎は2葉の図、溜池分布図、島畑分布図によって、解かれる。江戸、明治期を通しておびただしい数の溜池が東部に、無数の島畑(図1)が西部に分布していたのである。

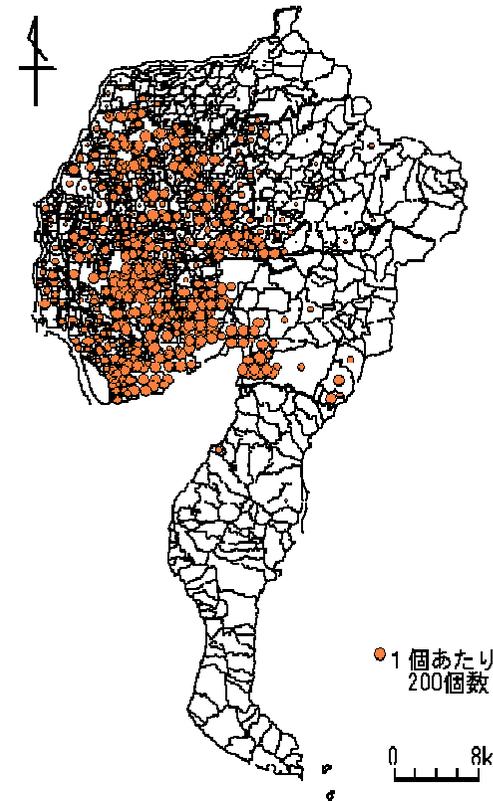


図1 尾張西部の島畑

特に、水田1筆の中に浮かぶ島畑については、それがあまりにも小面積であるが故に、明治時代の2万分の1地形図には現れてこない。近世の村絵図、明治の1200分1地籍図によって初めて確認されるのである。

水田造成の為の干拓地においても短冊形の水田区画の中に相似形の島畑がセットになって作られている。田畑融合の景観がこんな所にも生み出されていくのである。

さて、次に明治初期の景観を示す美濃に移ろう。対象としたのは美濃南部の安八、不破、上石津、下石津、多芸、海西郡の6郡である。

**4. 田と畑の評価**：江戸時代の検地帳によると田の評価が畑のそれよりも2, 3割高い。例えば、上田の石盛（反あたり石高）が1.8石とすると上畑のそれは1.6石というように2斗落ちを原則としていた。このイメージが強いので、いずれの村においても田の地価は畑の地価を上回っているものと想像していたら、全く逆転の評価がなされていた地域が浮かび上がってきた。それは美濃安八郡南部および海西郡の大水田地帯（輪中地帯）であった。尾張海西郡立田村でもそうであったように、その島畑は自家用野菜を作るだけでなく古くより商品作物を栽培し、かなり有効に利用されてきた。綿栽培の分布図（**図2**）と見事に一致するのもうなずける。低湿地すぎるが故に水田（堀田）耕作は不利で、畑の評価の方が高くなったのである（**図3**）。

#### 5. 人口・牛馬・船車

各種人口についての図が書けたが、その中でいくつか紹介しよう。出・入寄留人口の図を並べると入寄留者が大垣や高須の都市的集落に限られていたのに対して、出寄留者は全村から多数出ていた。大垣、高須においてさえ入るより出る者が多かったのが、地域全体として他域（おそらくは

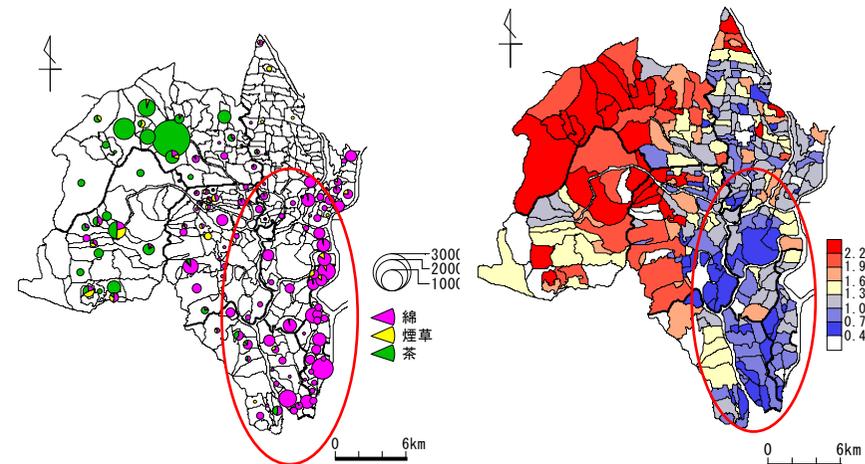


図2 島畑の綿

図3 田／畑の評価

近隣の大都市である岐阜、一宮、名古屋）への流出超過の構造が見いだされた。職業別人口をみると農民は全村に、雑業者、工・商人は大垣、高須の都市に多くみられ、僧侶が全村でみられたのに対し、武士、医者は都市に集中していた。資産額別戸数を検討すると資産1000円以上の農家の占める割合が高かったのが大垣周辺の安八郡北部の諸村であり、西部山岳地帯および南部水郷地帯に向かうにつれて資産200円以下の低所得者の占める割合が高くなっていった。

牛馬の分布は、西部山岳地帯では牛、東部輪中地帯では馬とはっきり分

かれていた。牛は飼料用に、馬は運搬用に使用されたと思われるが、共に1村あたり数十頭を抱える村が多く、それぞれの地域での家畜利用のあり方が追究されねばならない。船と車の分布もきれいに分かれていた。船は安八郡南部および海西郡の水郷地帯、車は安八郡北部および不破郡の中山道、美濃路沿いの諸村で使用されていた。船においては漁船、鵜飼船、乗客船などの詳細が、車については荷車、人力車などの詳細が『町村略誌』に載せられているのでさらなる検討をしていきたい。

**6. 給金：**農作業と技術職である大工、桶職人、屋根葺の日当を比較してみよう。後3者の日当がほとんど30銭以上であったのに対し、農業労働者のそれは、安八郡北部を中心に20銭を下回る村が多かった。その中であって下石津郡および安八郡南部、海西郡では輪中低湿地での農業労働の過酷さが賃金に反映されたのであろうか24銭以上の村が多く、中には30銭を越える村も散見された。女性労働としての機織りは、尾西、一宮機業圏に入るであろう長良川沿いの数カ村に限られていたが、そこでの賃金は20銭以下に低く押さえられていた。

これらの職業に対して、奉公人（下僕と下女）の日当は微々たるものであった。下僕の日当は平均12銭、下女のそれはさらに低く7銭程度であった。地域差以上にジェンダー差が際だった分布図となった。

以上の分布図作成という作業を通して、文字史料を眺めているだけでは想像もつかなかった様々な近世・近代の地域像を発見することができた。

次章では、こうした地誌のデータから都市と農村の関係、中心と周辺の関係についての空間的秩序をG.W.スキナーの中心-周辺論を基に考察してみたい。

### III. G.W.スキナーの中心-周辺論への適用

#### 1) 中心周辺構造に関する論考

ドイツで自ら農場を経営しながら、都市からの距離に応じて各種の農業経営方式が同心円状に成立するという古典的農業立地論を考案したチューネン<sup>2</sup>、あるいは都市活動の機能的側面を重視し、市場原理に基づき都市が六角形の頂点に階層的に配列するという中心地理論を構築したクリスタラー<sup>3</sup>。この両者が都市を核とした中心-周辺構造に言及した産みの親であり、この結節地獄的思考は後続の研究者に大きな影響を与えてきた。

そのなかで、クリスタラー・モデルを援用して前近代中国における市場社会論を構築したのがG.W.スキナーである。スキナーのモデルは、対象とする社会における中心地の階層構成や上位都市と下位中心との結びつ

きに関して、基本的にクリスタラー・モデルを踏襲し、六角形モデルが前近代中国社会においても適合することを実証した4。

スキナーがその後の地域研究の中で精力的に進めているのが中心－周辺 (Core-Periphery Structure) 理論の構築と実証である。一言で紹介すれば、都市の影響が連続的に周辺に及んでいくというもので、これはクリスタラーモデルを応用した都市階層論が結節点を重視した点的な空間論であったのに対し、面的に変化していく地域的差異を重視した空間論である。現在その実証を前近代の中国、日本、フランスで行っており5、中国南部広州地区での成果は詳しく報告されている6。フランスとともに日本に関してはまだペーパーにはなっていないが、前者ではボルドー、後者では名古屋を中心とした地域を設定し、中間的成果がワークショップ等では繰り返し紹介されている。

## 2) G.W.スキナーの中心－周辺論とその応用

スキナーの対象は名古屋を中心とし、北は諏訪湖、南は尾鷲までを含んだ GNR (Greater Nobi Region 大濃尾地域) と命名した地域で、それを名古屋を中心に同心円状に4つの圏に分割し、最近隣圏を Inner Core (中心内) とし、順次 Outer Core (中心外)、Near Periphery (近周辺)、そして最も外側を Far Periphery (遠周辺) と名付けた。明治 12-20 (1879-87) の府県統

計書記載の各項目について、各郡の平均値をもちいて、それらが見事に漸移的变化を示していることを明らかにした7。例えば定住体系、農業体系、運輸体系、財務体系、賃金体系、就業体系指標の中でひとつずつ示せば、人口密度は IC→OC→ NP→ FP と進むに連れて 7.78→4.07→ 2.51→ 0.68 となり、総農家に占める自作農の割合 (%) は 21.6→32.3→ 37.3→ 39.4 と増え、1000 人当たり人力車数は 6.84→6.03→3.85→2.07 と減り、耕地 1 町当たり地税 (円) は 15.54→13.01→11.87→9.20 と減り、瓦屋根職賃金 (銭 / 日) は 25.4→22.2→22.0→20.5 と減り、男子 1000 人に占める石工の割合は 4.42→7.42→13.67→19.02 と増加している。

スキナーモデルは、スケールを変えても、すなわち尾張という GNR の中では Inner Core にあたる小地域内においても、分析単位を郡から藩政村に小さくすれば、十分あてはまるのではないかと、というのが筆者の予想であり、その実証を試みた。

## 3) 江戸期尾張の中心周辺構造

### 1) 村域設定、圏域設定

徇行記、覚書で藩政村別に記載されている諸項目を比較検討して、尾張全体の地域構造を明らかにするために、次のような作業手順をふんだ。

①データベース作成のために徇行記に記載された藩政村を郡別目次順

に番号を付ける。②上記の村別データベースを地図化するために GIS を使用。その原図作成にあたっては、藩政村の境界線を入れる必要があり、そのために『尾張志』付図を利用した。③名古屋城下町から周辺に移動するにしたがって、如何に地域が変容していくかを測定するために2つの基準をもうけた。1つは名古屋を中心にして距離別に4つの圏、すなわちスキナーの命名にならって Inner Core, Outer Core, Near Periphery, および Far Periphery を設定した。他の1つの基準として、4つの圏それぞれにおいて都市的な村落から非都市的な村落への区分として4つの階層、すなわち上位都市、中位都市、下位都市、および非都市をもうけた。

この2つの基準をもうけたのは、1つには名古屋城下から周辺に移動するにつれて漸移的な変化がみられるであろうし、一方において都市的な村落から非都市的な集落に向かうにつれてやはり漸移的な変化がみられるであろうとの想定からである。そしてこの両者を組み合わせれば、4 \* 4 のマトリックスとして図示でき、「中心内」かつ「上位都市」の村々（1-①）から、「遠周辺」かつ「非都市」の村々（4-④）に向かって漸移的な変化がみられることになる。

### 1) 中心-周辺の空間的地域変化

こうした中心-周辺の空間的地域変化が実際に如何に現れているのかを、

①人口指標に関する空間的差異、②畑地率および生産性の空間的差異、③馬数の空間的差異、について考察した。ここでは「中心/都市」的村落から「周辺/非都市」的村落へと漸移的変化がみられた①②は割愛し③についてのみ図示しておきたい。

馬数の空間的差異を尾張全体のマトリックスで示すと、図4のようである。人口、土地、生産性といった前述の変化傾向と、漸移的変化を示すといった基本線は認められるが、根本的に異なっているのが「方向」である。前者はいずれも「中心/都市」的村落から「周辺/非都市」的村落へという図上、左上右下への対角線上の変化であったのに対し、ここで示す馬の場合は「周辺/都市」的村落から「中心/非都市」的村落へという図上、右上から左下への対角線上の変化を示した。中心-周辺村落間の変化では 19.3（匹/1村）→17.5→17.5→22.2 と周辺に行くにつれて増加しているし、都市-非都市村落間の変化では 46.2→28.4→24.5→16.5 と減少している。このことは都市的村落、とくに周辺部のそれに、すなわち宿場町をはじめとした街道沿いの都市的村落に運搬用として多数常備されていたことを示している。これが1822年になると、馬の絶対数が1村平均19.1匹（1672）から5.5匹までに減少しており、馬の必要度がなくなりかけている中、運搬用の馬利用といった点が残っており、その分布傾向は1672年時

と同様の「周辺／都市」的村落に多く、「中心／非都市」的村落で少ない。

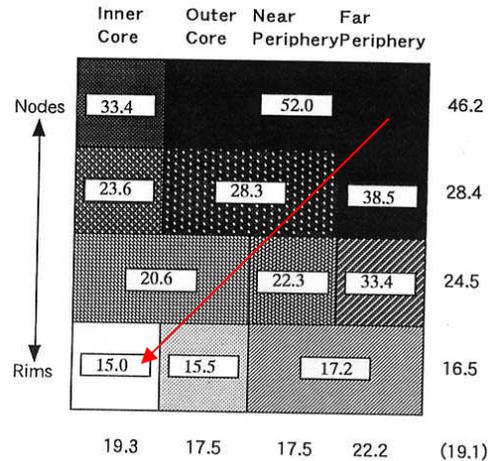


図4 尾張における馬数の空間的分布(1672)

#### IV. 隠岐の地誌・仙台の地誌分析—むすびにかえて—

地誌が従来の地理学研究、あるいは歴史学研究の中で取りあげられることはままあったが、それはあくまでも系統的な主題のもと、例えば人口、土地利用、新田開発研究などにおいて、その概観をおさえるために利用されたにすぎず、地誌そのものを主役として扱われることはなかった。それはひとえに個別事項の記述の薄さ、網羅的記載によるわけであるが、見方を変えれば地誌研究はよみがえるであろう。すなわち、単一項目、系統項目のピックアップ利用型研究ではなく、地誌の特色を活かした総合的分析

をめざすのである。今後の課題として、全国で藩領単位で残されている地誌を収集し、本発表で試みた尾張・美濃の地誌分析と同様な方法で、地図化と地域像の創出作業を行っていく。その為のステップとして隠岐の『増補隠州記』(1688)および仙台の『安永風土記』(1780)分析を手がけたので、それぞれの一知見を示してむすびにかえておきたい。

#### 1. 隠岐の地誌『増補隠州記』から得られた三位一体説

隠岐では、家族単位でバラエティにとんだ生業を行なおうという姿勢、いわばミニ村落的行為、これが非常に強く見えた。家族というミニ村落を多数抱えた自己完結指向の強い村落、そして個々の村落で達成され得なかった部分を、主産地形成というもう一つスケールの大きい領国内で補完させる装置を有していた。そのうえで対外交易を発展させてきたのが隠岐である。いや、こうした姿は隠岐だけではなく日本の前近代の村落構造の特色ではなかろうか<sup>8</sup>。

家・村・隠岐島全体とスケールを変えても農・漁・林の三位一体構造があることを指摘しえたのは、資料とした近世地誌の数値情報を全てデータベース化し、GISを利用して無数に分布図を作ったことによる。一見無用と思われる地図まで簡単にできてしまうところがGIS初心者にとって最大のメリットといえよう。

## 2. 仙台の地誌『安永風土記』による船所有村

1村当たりの船数について郡別に検討すると、仙台藩北部太平洋岸地域に多く、第1位が本吉郡の61.7艘、第2位が牡鹿郡の29.0艘、以下、桃生郡18.5艘、気仙郡12.7艘と続く。

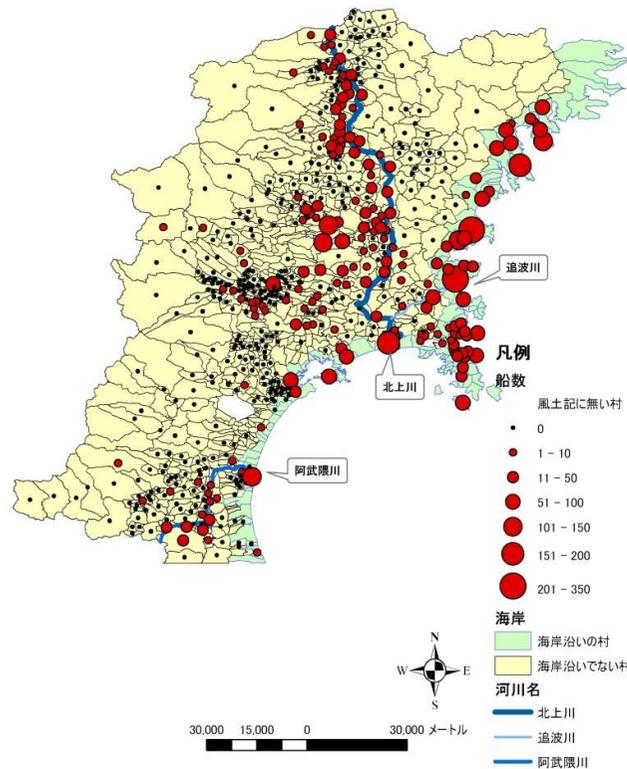


図5 安永風土記における仙台藩の村別船数(1780)

村別にみて仙台藩で最大の船所有村は家数数 597 戸の本吉郡歌津村で

340 艘であった。その内訳は「風土記」によれば、商船が 10 艘（天當舟 1，五太木舟 9），漁船が 330 艘（小舟 19，さつは舟 34，かつこ舟 277）であった。

海岸沿いの村とそうでない村との船所有数を重ね合わせた図を示しておきたい（図 5）。主要漁港、北上川沿岸村に多数の船が所有されているばかりでなく、第 2 級河川や平野部の諸村でもかなり船が利用されていたことがわかる。米の生産と年賀米の運搬に北上川という主流のみならず北上川に通ずる幾多の支流が重要な動脈となっていたのである<sup>9</sup>。

- 1 溝口常俊編『江戸期なごやアトラス』名古屋市総務局，1998
- 2 Thunen, J.H. von: Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie, 1826 (近藤康男『チウネン孤立国の研究 (近藤康男著作集 1)』農産漁村文化協会, 1974)
- 3 Christaller, W.: Die zentralen Orte in Suddeutschland: Eine ökonomisch-geographische Untersuchung über die Gesetzmässigkeit der Verbreitung und Entwicklung der Siedlungen mit städtischen Funktionen, 1933 (江沢譲爾訳『都市の立地と発展』大明堂, 1969)
- 4 Skinner, G.W.: Marketing and Social Structure in Rural China, The Journal of Asian Studies, Vol.24, No.1,2,3, 1964, 65.
- 5 Skinner, G.W.: Regional Systems and the Modernization of Agrarian Societies -France, Japan, China-, Paper prepared for the Faculty Seminar, University of California, Davis, 1991.
- 6 Skinner, G.W.: Differential Development in Lingnan, Paper prepared for the symposium on The Great Transformation in South China and Taiwan: Markets, Entrepreneurship, and Social Structure, Cornell University, 1992
- 7 Skinner, G.W.: Nobi as a Regional System, Paper prepared for the Second Workshop of the Nobi Regional Project, 1988
- 8 溝口常俊『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会, 2002.
- 9 溝口常俊『「安永風土記」にみる仙台藩の田畑と人口—『御領分絵図』と GIS による分析—』, 高木正朗編『18・19 世紀の人口変動と地域・村・家族』古今書院, 2008, 32-48.